

第二章 オウム原理主義者が見た事件の深層

坂本弁護士事件の嘘

——じゃあ、オウムが起こした個々の事件について聞きたいきます。

まず、坂本弁護士事件についてですけど、もうこの事件については、実行犯の早川紀代秀や中川智正、端本悟、岡崎一明などが犯行を認めて、事件の真相が明らかになりました。

事件当時、高崎さんは在家信徒だったんですよね？

高崎 ええ。まあ、その時点で僕は本当にやったかどうかというのは判断できなかったんですけど、僕自身としては、尊師のお言葉が嘘だとは思わず、そのまま受け取って信じていました。単純に、やるメリットは何もないのにやるはずがないじゃないか、と思っていたね。

——でもやっちゃいましたよね。それは麻原さんが言っていた「有言断行」とは違うんじゃないでしょうか？

高崎 もしこんなことを言うのと、僕に対して血眼になって向かってくる人がたくさんいると思うんだけど、まず、尊師っていうのはすごいといつも思っていた。何ですごいのかと思ったかというと、やっておきながらあそこまで堂々と否定しきっていたと。全く動揺することなく、ドイツのボンでも成田空港でも、堂々と記者会見を開いて否定していたよね。

——それを今思うとそれが「すごい」ということですか？

高崎 うん。それから、坂本弁護士事件の一月半くらい前に、尊師がヴァジラヤーナの説法をしたよね。そのとき初めて詳しい「ボア」の説法をしたよね（巻末・参考資料①参照）。そしてそのすぐ後にそれを本当に実践してしまうのだから、「有言断行」と言えるんじゃないかな。当然、「有言断行」というものが、イコール「救世主」という絶対条件とは言えないけど……。でも、少なくとも強靱な精神力を有しているとは言える。

——確かにそうかもしれないけれど、麻原さんが実行犯以外の弟子たちやマスコミを通して日本人の多くに、「やっていない」と嘘をついたことは間違いないでしょう。高崎 嘘をついているのかなあ……。

僕はすべて嘘をついていると思っていない。つまり、事実と違うものに関しては、はっきりと「やってない」といえるよね。で、最も我々が聞きたい核の部分については、「保留」という状態だよね。いや、それどころか「無罪」とまで言っている。

もし、そこで罪を認めてしまったら……。現代人というのは非常に短絡的な、インスタントな解釈を求めたがると思うんだけど、もし罪を認めてしまったら、尊師の教えも間違っていたとほとんどの人たちが考えてしまうんじゃないかな。これは弟子たちも含めて多くの人たちが陥ってしまうと思う。そうすると、シヴァ大神の系譜の聖者の教えがぐらついてしまうわけだね。

私なんかは、もう何があっても動じないつもりなんだけど、今まだ不安定な弟子、つまり「絶対的真理」ってものに確信が持てない弟子たちに対して、すべての事件の真相を話してしまうのは得策でないと思ってるんじゃないかな。

それに、尊師が嘘をつくというのは、弟子たちや日本人に嘘のカルマがあるからであっ

て、その嘘のカルマを落とすために言ったといえるんじゃないかな。

—— そういう論理なわけですね。でも、そういっただけじゃきりがいいですね。

じゃあ、亡くなった坂本弁護士一家についてはどう思うんですか。仏教でいう殺生戒に触れるわけですね？

高崎 簡単に言えば、単なる殺人ではなく、「ボア」だったと思うけれど、それをわかりやすく言わなきゃならないよね。

たしかに、小乗・大乘の実践の中で不殺生というのは当然あって、相手になした苦しみを自分が受けなければならぬという「カルマの法則」は、これは尊師もいじることができないし、僕たちもいじれないし、「絶対の真理」だというふうにお釈迦さまも言っている。で、それを今まで徹底的に説いてきたのが尊師なんだよね。

にもかかわらず、裁判とかで明らかになりつつある事実関係を聞けばわかるように、尊師の指示がきつかけとなって、事件が起こったのは間違いないでしょう。

で、これはそれなりの覚悟があったはずだと思うんだよね。自分に対して不都合な相手を単に抹殺してしまおうという、僕たちがイメージする悪役のような動機じゃなくて、相당한「菩薩としての覚悟」があったんだと思うんだよね。

—— 菩薩としての覚悟？

高崎 うん。「救世主としての覚悟」といったらわかりにくいと思ったんで、「菩薩としての覚悟」って言ったんだけど。つまり、坂本弁護士の来世まで見極めて、今こそ彼の生命を断つて、これ以上の悪業をストップさせましよう。

—— でも、「カルマの法則」を考えると、殺せば殺されるわけでしょう？ 痛みを与えれば、自分に痛みが返ってくるわけでしょう？

高崎 もちろん肉体的に相手を苦しめた、その苦しみは自分が背負わなければいけない。それに、死ぬってことは、意識の完全な断絶だよ。意識の移し換え、トランスフォームともいえる。

生きていても大きな外的ショックを受けて、記憶喪失になる人もいるよね。つまり、「ボア」をするってことは、普通の人なら死んでしまうような外的ショックを受けるっていうカルマを作ることになると思う。

例えば、牛なんかは、重機や大型ダンプの騒音で、ストレスがたまっただけで死んでしまうって聞いたことがあるけれど、少なくとも人間はそういう動物に比べると外的ショックには強いよね。で、修行っていうのは、その外的ショックに強くなる方法でもあるんだよ。その延長線上に「ヴァジラ・チッタ」、つまり絶対に壊れない金剛心というものがある。

「ボア」という思い込み

—— じゃあ坂本さん一家が亡くなるときの苦しみは麻原さんが背負っているって？
高崎 うん、背負っている。

当然、直接危害を加えた弟子たちも背負っているだろうけど、その源泉は尊師だろうか、そのカルマを一番背負っているのは尊師。法則から考えると。

それは尊師が激しい修行をやったり、自分がいろいろな病気になることによって克服していっていると思うんだけど、でも、それは単に肉体的レベルにおけるカル

マの理論であつて、これが「ポア」ということになる、人間世界での生を彼らは終えてしまつて、その後、魂の流転として利益のある転生をしたんだ、と僕は解釈している。

——でも、実行犯の端本悟さんが事件後に、麻原さんから「坂本弁護士は地獄。奥さんは餓鬼。龍彦ちゃんは動物」と聞いたと証言している。これでは全然「ポア」になつていないのじゃないですか？

高崎 それは確かに僕にとつてショックだった。それまでは「ポア」されていたんだらうと思つて、今頃「龍彦ちゃんやんは天界へ行つてよかつたね」つて祝福してやりたいぐらい。

そういう意味で冥福を祈っていたんだけど、しかし実際の転生先は地獄・動物・餓鬼であつたと。だけど、僕が今思うのは、今頃例えば地獄から人間界へ行っているかもしれない、動物から天界へ行っているかもしれない。つまり、本来はもつと長く苦しみの世界に存在しなければならなかつたカルマが、非常に短い期間で終わるようになったという解釈をしている。悪業を積んでいた坂本弁護士と、その経済的庇護下にいた奥さんと子供が、より悪業を積まなくて済み、しかも苦しみを一気に味わうことにより、彼ら自身に内在している悪業の清算をよりスムーズにしたと。少なくとも、尊師との深い縁というのができたと思うんだよね。

お釈迦さまの時代に、マリツカー妃という、徳の高い在家信者がいたんだけど、彼女は犬と淫行したために、一週間地獄へ堕ちた後、天界へ行つたという記述が經典にある。つまり、お釈迦さまですら彼女を救済することはできなかった。地獄でのカルマの清算が必要なきもあるんだ。

これはお釈迦さまも言っている真理の法則から考えてみてもそうだと思うんだけど、明らかに現代人の構成している意識や、満たしている煩惱のあり方というのは、それは間違いなく三悪趣といわれる地獄・動物・餓鬼に至る要素がほとんどなんだよね。法則を条件として見たならば、尊師も九九・九パーセント以上の人が三悪趣に堕ちてしまつておつちやつてゐる。

それを考えると、この世の中でも、たとえ社会的地位にある人だつて、有識者といわれる人たちだつて、三悪趣に堕ちる傾向が強いだろうし……。坂本弁護士たちは、尊師に対して逆縁という形であつても強い縁というか、絆ができたという恩恵を受けたと思う。それは、オウム的事件で犠牲になつたすべての人たちに当てはまるけれど……。

——だからどうだつて言うんですか？麻原彰晃と縁が深くなつてもしょうがないでしよう？

高崎 いや……。

僕は尊師は真実だと思つてゐるし、真理だと思つてゐるし、尊師の思い描く思考や心の働きはものすごい上昇的、上流の意識、上向きであると思つてゐるから、その上昇気流に坂本弁護士たちもその縁によつて乗つていくだろうな、という確信はある。でも、僕だけに確信があつてもしょうがないわけだから言うけれども、尊師が本当に今世紀末に登場するキリスト・救世主としたならば、そのすべての行為は肯定されるんじゃないかな。つまり、救世主の役割というのは魂の救済だからね。

——じゃあ、坂本弁護士一家はいい輪廻の流れに乗つたと考えるわけですね？でも、そんなこと証明できるんですか？

高崎 それは証明しろといわれても……。少なくとも尊師との縁は深くなつただろうし……

...

それに坂本さんの存在によって、あのまま彼が生存していて、オウムが社会的に悪だという証明がされて、教団がごとく潰れていく形であれば、当然今までのように教団は拡大しなかっただろうし、そうすると当然、事件前に出家者が千数百人になったり、オウムが世界に羽を伸ばすこともなかったと思うんだよね。

だけど、彼がそこで命が断たれたということは、一つの大きな飛躍の材料にもなっているんだよね。つまり彼の死は無駄ではなかったと思う。彼の死が、——ここところは非常に非常に理解しづらいと思うんだけど——オウムが飛躍的に拡大する要因になったことは間違いない。

——結果的にはそうかもしれないけれど、ちよつと理解できませんね。殺人の疑惑がかかったオウム真理教という宗教団体の存在は広まりましたけれど、教えは広まらなかったんじゃないかな？

高崎 確かに風当たりは強くなったと思う。だけれども、それがゆえに信仰する人は頑なに信じるようになったよね。信仰の強さというのが、風当たりが強いがゆえに生まれてきたと思う。

より修行しなければならぬ、より教学しなければならぬ、より真実とは何かというのを求めなければならぬ……。弟子たちのそういう意志が強くなったと思う。そういった意味で中身が固まったというか……。

——坂本弁護士之死によってですか？ でもそれってオウム側の見方に過ぎないんじゃないですか？

それに、逆に言うならば、殺されて六年後の九五年の九月に、坂本さん一家の死体が見つかることによって、ショックを受けた人が多いと思うんですね。それでオウムをやめたといった人も多いと思う。だから結果的には失敗でしょう。

高崎 いや、これは今後いろんな形で話していきたいと考えているんだけど、事実関係云々よりも、私たちが生きている者として、生命として求めていかなければならないものは、一つの「志（こころざし）」だと思うんだよね。

それは心の成熟であったり、靈性の向上とも言われるし、それは意識の大いなる覚醒だと思うし、それは自分本来の姿に立ち返るべき道だと思うんだよね。で、それが私たちの修行に入った目的であるならば、教団というのはあくまでも形であって、それにまつわるいろんな動きというものは、私たちの本質的な問題ではないんだよね。枝葉の問題だと感じるんです。

まあ、仮に麻原尊師が僕たちに対して完全なピエロであって、大嘘をついて、事件を隠していたことが多々あったにしても、それ以上に僕たちの心の扉を開いて、自分の内側にあるものを見つめさせてくれたという点においては、全く比べようのないほどの恩恵を受けているし……。

——高崎さん個人の問題として考えるならばそうかもしれない。しかし、坂本弁護士一家のご遺族に対してそれを面と向かって言えますか！

高崎 そんなことは言えないですよ。

僕が言えることは一つ、亡くなった方の冥福を祈るだけ。冥福というのは何かというと、彼らの魂の流転、それが真実に向かいますように、という意味の祈りだよ。

で、彼の死というのは全く無意味じゃなかったと。だけど、それは遺族の人たちには説明できない……。

—— やっぱり説明できないじゃないですか？

高崎 だけど、坂本さん一家が死んでみんな悲しんでいるよね。で、たくさんの人が悲しみの涙を流したと思うんだけど、でもその悲しみというのは、魂そのものがまるで完全に消滅してしまったかのような悲しみだと思うんだよね。僕はそうではないと思うし、誰でもいずれどのような形にしろ死んでしまうわけだから……。で、彼らは間違いなく別の生命体として、新しい人生を歩んでいる。

で、「死」ってというのは、殺されるかもしれない、交通事故で死ぬかもしれない、病気で死ぬかもしれない、自殺するかもしれない。今この瞬間でも多くの人たちが死んでいつているわけで、避けられないものであるし、その誰もが避けられない死に対して、単に泣き暮れるんではなくて、あくまでも高い世界へ行つてほしい、あくまでも魂の流転としての成長をしてほしいと思う。これだけです。

—— じゃあ、オウムが坂本弁護士事件や地下鉄サリン事件を起こしたことを知ってから、高崎さんの麻原さんに対する信仰は変わらないと？

高崎 変わらない。よりむしろ強くなったともいえる。

—— でも、高崎さんがこのことを世に主張するとして、いろいろ反発があると思うんですね。例えばそういう人は許せないと。そんなことを言う人は死んでほしいと。そう言われるかもしれない。そう言われたらどうしますか？

高崎 それには深い哀しみを感じるね。

—— それは「哀れみ」ですか。

高崎 「哀れみ」って言ったら、仏教的な哀れみをみんな理解していないから、上の者が下の者を見下すという意味においての「哀れみ」というふうにとらえてしまうだろうから、そういう言葉は使えないけれども……。だけど言えるのは、一つの問題や事件が起きて、自分が何らかの被害を受けたときに、対象に対して憎しみや怒りや恨みを向けたところで何ら解決にもなっていないということだね。

で、それは仏教的な法則、これはオウム真理教だけじゃなくて、日本や中国の仏教、インド思想に共通した理念であって、あるいは今や西洋神秘主義に受け入れられている価値観でもあるんだけど、「カルマの法則」というものを考えたら、当然、他に向けられた憎しみ、恨み、嫌悪というものは、自分がそれを受けなければならぬという法則が存在するんだよね。

—— でも、それを言うならば、麻原さんが坂本弁護士一家を殺害するように指示した理由というのも、坂本弁護士がオウムや麻原さんに対して攻撃を加えてきたので、それに対する嫌悪や憎しみという感情があったからじゃないでしょうかね？

高崎 それは違うと思うね。一般の人たちが抱くような嫌悪、憎しみではないと思うし、逆に無感動な気持ちでロボットのようになんて殺してしまったのとも違うと思う。

あくまでも真理を守る使命感のために成し遂げたことだと思う。

—— 真理を守る？

「真理を守る？」

高崎 真理、それは当然グルの説かれる法則そのものが納得いくもので、否定しようのないものであったから、あるいは、尊師の愛というものをグルと弟子の関係の中で実感として感じていたから実行犯も躊躇なくやったのだと思うし……。

だから、尊師の指示されることは、救済につながるものなんだろうと。犠牲はあるけれども、この人類にとって大きな利益があるんだろうと、真理を守るためなんだと。そういう思いのもとにやったと思うんだよね。

確かに、殺す瞬間というのはいたたまれない気持ちだったかもしれない。だけどそれを支えていたのは信仰だと思う。

だから、憎しみや嫌悪、おまえたちとは一緒に暮らせない、というような思いのもとにやられたものではないと。

—— だけでも、実行犯だった早川なり、中川なり、みんな「申し訳なかった」と反省していますよね。つまり、彼らの成長にもならなかったといえるんじゃないでしょうか？

高崎 うん。何であんなことを言うんだろうというふうに僕には映るんだけど……。でもそれは建前上の意見陳述であって、本音は僕は違うと思う。

—— じゃあ、本音はどうだいいうんですか？

高崎 本音は殺さざるを得ないときもあるんだ、と。正当防衛というか、いたしたかったと思うっていると思う。

—— そうかなあ？

高崎 まあ、これはわからないよね。本人が違うと言えば違うだろうけど、でもこれは別にオウムの問題だけじゃなくて、世の中の歴史とか世界的なことをみてみると、何かを成し遂げるときにね、犠牲つてものは伴うものだし、それが殺す・殺さない、破壊・破壊しないってことになるかどうかの問題であって、必ず犠牲は伴うものだし……。それだけオウムが大きくなければならない教団であったならば、それだけの代償というか、坂本弁護士を殺害しなければならぬという、いたたまれない代償というのは避けられなかったんじゃないかな。

—— じゃあ、実行犯になった弟子たちも犠牲になったと？

高崎 犠牲っていうのは？

—— つまり実行犯であることによって苦しんでいますよね。おそらく極刑になると思うんです。高崎さんの持っているような信仰心をなくしていますし、どう考えても犠牲でしょう。

高崎 犠牲になるかどうかっていうのは本人の心の持ち方だと思うね。彼らが「自分のやったことは真理を守るためであった」と思うならば全然犠牲だと思わないし、「自分は麻原という俗物に指令されて、実際はやりたくなかったんだけど、とんでもないことをやってしまった」と思ったら、犠牲ととらえるだろうし。それは僕が言うことでもなく、彼ら自身が決めることだと思う。

でも、本質的には彼らの成長になっていると思う。それは、早く自分の悪いカルマを落とすことができるから。

—— じゃあ、ああいう実行犯の立場に置かれたのもカルマであると？

高崎 カルマであると。で、ああいう立場に置かれれば置かれるほど彼らのカルマっていうのはどんどん解放されていって、いずれそのカルマが落ちきったときに、彼ら自身が大

いなる魂の成長を遂げるんじゃないかと期待をしている。

つまり、彼ら実行犯たちが持っている悪業の因というものは、もうすでに彼らの中に積み上げられているわけだね。それをどのように解放するかは、条件によって全然違うけれども、彼らが今味わっている苦しみというのは自己に内在する因が現象化したものでしょ？ それを早く経験できるのは、導師っていう存在があったからこそ、そのような苦しみを早くを経験できるわけだよ。でもそれはいずれ未来において味わわなければならなかった苦しみなんだよね。「カルマの法則」から考えるならば。

そのいずれ味わわなければならぬ苦しみを、カルマの理法がわかっているこのときに、まとめて経験できるということは、修行を進める大きなチャンスだと思う。

——でも今この時点での彼らの精神状況を考えると、オウムの教義から言っても全然進化していませんよね？ 教祖からの指示を免れなくて、無理矢理やらされてしまったと。関係者に対しては申し訳なかったと。全く逆の方向に向かっていているんじゃないでしょうか？ もうみんな悲惨な精神状態ですよ。

高崎 多分それは、彼らが導師の教義の束縛というものから離れたいんだろう。だからそういうことを言っているんだと思うし、その束縛から離れることによって本当の解放を得るんだったら、そうであつてもいいと思う。導師の教えを否定することに対して咎めることはできないと思う。

ただ、彼らが麻原導師というものに抵抗することによって、本当の自分というものを確立できるんだつたらやつてほしいけれども、彼らの状態、これはマスコミから聞いている印象でしかないんだけど、暗いというか、明るくないというか、沈んでいるというか……で、そこで沈んで葛藤しているってことは、当然割り切れていないわけ……。

——というよりも、彼らにはもう未来がないからじゃないですか？ あるいは後悔しているからじゃないですか？ 一生牢獄の中でしようし……。だからじゃないですかね？

高崎 僕が言えることは、確かに彼らは牢獄に一生入れられるかもしれないけれど、頭の中の牢獄、心の中の牢獄から解放されてほしいなあと願うだけだね。

——心の中の牢獄？

高崎 それは、「現世的価値観」と「現世を超えた法則」との葛藤から苦しんでいるわけで、そういう逆境の中で、真実の心の解放というのを探してほしいなあと思う。

——じゃあ、高崎さんは全体的に考えるならば、坂本弁護士事件というのは成功であつたと考えるわけですね？

高崎 どうしてもそういうマスコミ的な聞き方というのは、簡単に一言で答えるというところがあると思うんだけど、どうしても一言で言えないところがあつて……。

一言で言っちゃうと、いろんな語弊というか、とらえ方が生じるわけで、そのへんは僕は丁寧に話したいところでなんだけれど……。まず一つ言えるのは、坂本弁護士事件がすぐに明るみになって、導師が逮捕されるような事態があの当時あったならば、教団の拡大もなかっただろうと。つまり、もしあそこでオウムが潰されていたら、その後の千数百人の出家者も出なかっただろうはずだよ。

出家者って一言でいうけれども、みんな全財産を捨てて、現世的束縛から真理に自分の身すべてを預けますということが入っているわけで、これっていうのは人間が現実

生活を生きている上で、ものすごい決断だと思うんだよね。まあ、人それぞれその決断の思い入れっていろいろは様々だろうけど、でも、端からた見てもすごいことだっていうか……。

そして、オウムが潰されたらそれだけの人たちの人生を変えることはなかっただろうと。信徒も教義によって物の考え方も変えることもなかっただろう。あるいは、ロシアをはじめとする世界各国に布教することもなかっただろうと。

あと、教団の中であれ以降、尊師のお子さんが何人も生まれているんだよね。それはヤソーダラー正大師（松本知子）のお子さんにとどまらず、ダーキニーといわれている人たちの中とか、あるいはケイマ正大師（石井久子）にもお子さんがいたという話だし。そういう子供たちも生まれてなかったわけだね。

あげれば限りがないけど、坂本弁護士事件が起こってから数年間というのは、ものすごく現象が動いてきた。それは、私たち個人の人生が渡り歩いているような、そんなものじゃない。もう、全世界的な影響というか……。それは表面的なものじゃない、それは当然、宗教的というか、かなり潜在意識に働き掛ける修行法が存在していたわけで、広くいうよりも、深い部分で、個人個人の深い人生観においてもものすごい影響を与えてきた。

つまり、まず感じるのは、坂本弁護士事件当時に、尊師が逮捕されなかったことによつて、これだけのことが展開されてきたんだという驚き。これは否定できない事実だと思う。

——でも、それなら初めから坂本弁護士事件なんて起こさなければよかったんじゃないですか？

高崎 まあ、それはそのときの状況で仕方なかったんじゃないかと思うんだけど……。

——必要であつたと考えるんですか？

高崎 必要だつたというか、避けられなかったと。それは要するに、坂本弁護士たちにその因が生じていたのだろうと。なぜならすべては「カルマの法則」だから。

つまり、僕たち一人が過去において、あるいは過去生において多くの人たちを傷付けたら、いじめてきたり、多くの生命体を殺してきたのと同じように、坂本弁護士、そしてその奥さん、お子さんの過去においても、多くの生命を傷付けたら、殺してきたりつていう経験はあつたはずなんだよね。で、その一つの因が現象化したんだと思う。これは地下鉄サリン事件など、オウムがしたすべての殺人に当てはまる。

「為したことしか自分に返ってこない」という原則に立てば、事件は「仕方なかった、避けられなかった」という表現を使ってもおかしくないと思う。それに対してどうとらえていくかというのは人それぞれであつて、妙な正義感で「私はいいけれど、こんなに苦しめたじゃないか！」と言う人は、一見愛情深い人に見えるけれども、実際はすべてをにくくりにして見ようとする短絡的な見方だと思う。つまり、一つ一つの苦の乗り越え方というのは千差万別であつて、苦しんだ人もいるし、苦しまなかった人もいるし……。苦しまなかった人に対して「苦しめ！苦しめ！」とか、「怒れ！怒れ！」「憎め！憎め！」と煽っていくマスコミの体質に大きな問題があると思う。そう煽る人は来世、あるいは今生の未来において自分が逆に苦しまなければならなくなると思う。これは「カルマの法則」という絶対の真理だからしょうがない。

事件によって亡くなった人たちについては、魂の流転として、より本質に向かつてほし

いと……。そう折るだけです。

——でも、被害者のご遺族が、そう言うあなたが憎いと言ったら？

高崎 僕は彼らに対して説教する立場ではないし、向こうもそういうものを求めているんじゃないだろうけど、もし彼らが憎しみ、あるいは暴力という形で、僕に対して怒りというのを持たれたとしてもしょうがないと思っている。そうとしか言えない。

——高崎さんが今回のようなことを世に公言するならば、いろいろな非難とか暴力とか受けるかもしれない。もし、そうなったらどうします？

高崎 耐えるしかないと思う。

——じゃあ、それで村井さんのように死んでもいいと？

高崎 うん。そういう腹のくくり方がある意味でできたから、こういう形で自分の意見を述べるようになったのだと思う。

実は、今年に入ってインスピレーションを感じたんだよ。それは「おまえの命はそう長くないぞ」っていうものの……。ただ、どういう形で死ぬにしろ、その前に主張すべきことは主張しなければならぬと思う。悔いのない生き方をしたいから。

井上被告について

——まあ、それはいいとして、例えば実行犯についていうならば、使命感めいたものはあったかもしれないが、愛や哀れみがあったとは思えない……。

高崎 でも、それを命じたとされる尊師は四無量心に溢れていた。尊師が初公判で語ったことは世に大きく出す必要があると思う。

——つまり、これですね。

「私は逮捕される前から、そして逮捕されたあとも、一つの心の状態で生きてきました。それは、すべての魂に、絶対の真理によってのみ得ることのできる絶対の自由、絶対の幸福、絶対の歓喜を得ていただきたい、そのお手伝いをしたいと思う心の働き、その言葉の働き、つまりマイトリ、聖慈愛の実践。

絶対の真理を知らない魂から生じる不自由、不幸、苦しみに対して、大きな悲しみを持ち、哀れみの心によって、それを絶対の真理によって取り払ってあげようとする言葉と行動、つまりカルナー、聖哀れみの実践。

絶対の真理を実践している人たちに生じる絶対の自由、絶対の幸福、絶対の歓喜に対して、それとともに喜び称賛する心、その言葉の働きかけと行動、つまりムリター、聖称賛の実践。

そして、今の私の心境ですが、これら三つの実践によって、私の身の上に生じるいかなる不自由、不幸、苦しみに対して、いっさい頓着しない心、つまりウペクシャー、聖無頓着の意識。

私がいま、お話しできることは、以上です」
これですね。

でも、井上嘉浩さんなどはこれを聞いて、その麻原さんの公判の翌々日の自分の裁判の中で、

「松本智津夫氏は自分の裁判の中で、これまでのこと（事件）を、『絶対の真理』を知らないゆえに生じる不幸と苦しみを、哀れみの心で取り去ってあげたいと思った『聖哀れみ

の実践』と言い、このような悲劇を作り出した心の真相を、独自の宗教理念を正当化することによって明らかにしようとしなさい」

と非難したわけですよ。僕はその場で彼の意見陳述を聞いていましたけれど、彼はブルと震えていましたが、はつきりと意見を言っていましたよ。

つまり、彼に言わせるなら、「救済」という名のもとに地下鉄サリン事件とかいろいろやってきたけれど、それが全然「救済」になっていないと考えると。俺はオウムをやめて、本当の愛と哀れみの実践をするんだと言っているわけです。それについては？

高崎 僕は井上さんとは全然違う見解で、尊師には偉大なる愛があったと思う。事件自体は尊師の四無量心（慈愛・哀れみ・称賛・無頓着）と、弟子たちの汚れた要素のミックスしたものが現れたのだと思っている。

それに、少なくともほぼ十年間、世話になった師匠であった尊師に対し、井上さんが真つ向から対決するというのは僕にはちよつと理解できない。そうすることが、彼の四無量心の表現なのかと考えると、僕はちよつと疑問を持ち、頭をかしげてしまうんだよね。

—— だけど彼の気持ちとしては、いろいろな事件によって苦しんでいる人がたくさんいると。それらの人たちに対する償いとして真実を明らかにすると言っているわけですよ。それは、それで、世間の人は「ああ、そうなのか、彼も改心したのか」とわかってくれると思うんですよ。

高崎 世間の人はね……。

でも、対師匠、対グルにおいても考えなくちゃならないと思う。少なくとも以前のグルだったことは間違いないから、出家して、生活の面倒をみてもらって、教えを乞うた立場でさ、あそこまで一個人として教祖を非難できるといふのは理解できない……。

—— しかし、彼はオウムでの体験をすべて否定して、オウムに入る前に読んだ大乘仏典などを読み返して、オウムというものを取り去った仏教という立場から、愛の実践として真実を明らかにすると言っていますよね。つまり彼は「オウム」的なものをすべて捨てて、発言していると言えるんじゃないでしょうか？

高崎 あいう、井上さんが置かれている立場っていうのは、まあ、僕なりに瞑想して、僕自身がもし彼のようなシチュエーションに置かれたらどうなるだろうかと、と追体験やシュミレーションをしてみたんだけど、間違いなく彼に入れられている情報というのは、完全隔離された状態で、世間がオウムに対して批判していること、そういうものをどんどんどんどん入れられていると思うんだよね。

つまり、彼が目の前にしている「現実」というものは、警察官からの話からもそうだろうし、検事からの話もそうだろうけれど、すべてオウムがやったことは単に多くの人たちを苦しめただけだったんだと。その情報をいろんな角度から徹底的に入れられているはずなんだよね。

新聞などは見ているだろうけど、教団から出されている本だとか、弟子たちのその後の体験とかは一切見せられていないはずであって、つまり、彼にとつて自由な情報の収集のされ方ができていなかったんじゃないかと思う。選択できていない、というかさ……。

本質的に言えば、それも彼のカルマなんだろうけど、もう徹底的にアンチ・オウムの情報しか入れられなかったはずだよ。彼の見ている現実というのは、目の当たりにするものだけがすべてであるから、「誰一人、ここで幸福になった人なんていないじゃないか！

「と知っているはずなんだよね。事件によって誰も覚醒していないし、真理に目覚めたんて言っている人なんて誰もいないんじゃないかって思っているはずなんだよ。

で、そういう環境にいると、一つの結論が出ると思う。つまり、今まで私たちがやったことは単にパニック、単に苦しみ、単に憎しみや怒りや悲しみを撒き散らしただけじゃないかっていう見解に至ると思うんだよね、間違いなく。それは誰がどう考えても陥ると思うんだよね。とくに井上さんというのは、自分の目の当たりにしている体験というのを非常に真つすぐに、ありのままに受け止めようという姿勢がすごくある人だと思っているから。それは僕にもよく似ている傾向があるんだけど……。彼には非常に通じるものがあると感じているから。

——でも、世間の多くの人たちも当然言うと思うんですね、「この現実を見つめるならば、たくさんの人たちが死んでいるし、社会を混乱させただけじゃないか」と。

高崎 僕はそう思っていない。大いなる覚醒がこの日本全体に起こっていると思う。

——大いなる覚醒？

高崎 例えば国家機構にしろそうだし、いろんな思想界、宗教界、あるいは軍事的組織、すべてのカテゴリーに対して、全世界的に共通の問題提起をしたと。ある種の危機感というものをぶつけたと。様々な問題点というのを浮き彫りにさせた。

つまり、オウムの問題というのは、すべての人にとって紙一重の問題だったわけだから……。われわれはこれでいいのかと。本来は、どうあるべきなんだと。そう改めて考え直した人は多いはず。

それにショッキングだったと思うのは、全く関わりのない一般市民があのようなたちで犠牲になって、自分もいつ死が訪れるかわからないと。「生きている者は必ず死ぬ」という生命としての原点に立たされた人が多いと思う。よっぽどいい加減に生きている人ではない限り、多くの人は自分を振り返ざるを得なかったと思う。他人事ではないと。

あるいはマスコミなども、連日連夜の報道で成長したと。ある意味で高度化していっただろうと。

日本の自衛隊にしろ、何人もオウム信者がいたと。エリート中のエリートである第一空挺団の中に何人もいて、もしかしたらオウムの支配下に入っていたかもしれないと。自分たちの組織を見直さざるを得なかったんじゃないかと思う。

宗教家も当然そうだよ。宗教の中にそういう危険性があるということを示唆されたと思うし……。

もう様々な分野で、試練というか、課題、警告を突き付けられたはずなんだよね。

——だからどうだっていうんですか？

高崎 じゃあ、突き付けられた人間はどうなるかっていうと、それを乗り越えるだけの強さが生まれてくる。乗り越えることのできないものは、滅んでいくという運命にあると思うんだよね。

そういった意味では、尊師という人物が存在しなければ、オウム真理教はなかったわけで、そうしたらもちろん大きな波紋を投げ掛けることはできなかったわけだよ。尊師の存在が投げ掛けた波紋というのは、たいへんな覚醒をもたらすであろうなあとと思う。

井上さんは「暴力によつては覚醒は生じない」と言っただけで、僕はそう思わない。

オウムの危険な歴史観

——確かに高崎さんの言うように、日本の至る所が「他人事ではない」と引き締まった面を持つようになったかもしれない。でもその反面、オウムが引き起こした事件によって、日本がより殺伐としてきたというか、闘争的になったとは言えないですか？

高崎 闘争は必要なんだよ。この世の中すべての現象が闘争だと思うんだよね。闘争っていう言葉は語弊を招くかもしれない……。見方を変えれば向上心、その向上心の現われが闘争だと思う。そして、闘争心がなくなるならば、この世の中は「平和」になるのではなく、退化するんだと思うよ。

これは歴史をみればわかると思うんだけど、第一次世界大戦があつて、科学が大きく進歩したよね。そして、第二次世界大戦があつて、核が開発された。つまり、人間っていうのは、死ぬ気にならないと、生死を超えないと、本当の発明・発見というはできないと思う。

——じゃあ、オウムの目指している世界、理想郷というのは平和のない、闘争的な世界なの？

高崎 いや、法則が広まっていれば別だと思うよ。それは真理の法則は本質的には闘争を超えているから、理想郷の「シャンバラ」というのは、闘争のエネルギーの昇華された向上心の世界になると思う。

しかし、今、この世は正法なんてなくなって、どんどん人の心は墮落している。もしこのまま、戦いのない世の中になったら、それはまさに家畜の世界のようになるんじゃないかな。逆に僕はそれが恐ろしいよ。

例えばある家にベットとして一匹だけ猫を飼っていて、飼い主が非常にやさしくて、腹が空いたときにはキャットフードを与えていたとしても、その猫は一見平和に見えるかもしれないけれど、いずれ豚のように太って死ぬよね、何の進化もなく……。

つまり、人間も含めて生き物というのは、法則なき、単なる平和によつては墮落する傾向を持つているんだと思う。「小人閑居して不善を為す」のようにな。

——なるほど……。じゃあ、進化するには、ぶつかり合いが必要だと言うのですか？

高崎 うん。とくに現代のようにエネルギーの低い世界で進化するには、闘争的ぶつかり合いは絶対に必要だと思う。

お釈迦さまの時代の出家の話を聞くとよくわかると思うんだよね。絶えず高弟たちは親とぶつかつていたんだよ。あの時代も今のオウムと同じで、親に出家を反対されて、激論して、一週間断食して「出家できないのなら死にます」と言つて出家したと経典に記述がある。

つまり、高い意識状態に至るためには、そういうぶつかり合いが必要であると。追い詰められることが必要なんだと思う。

——でも、オウムが凶悪な事件を起こしたことによつて、宗教的なもの、精神世界に対して、多くの人が不信と嫌悪を抱くようになったのは間違いないと思う。その悪影響は大きいと思いますね。

「修行」というものに対していかがわしいと思うようになったし、ヨーガ教室なんて、もうどこも閑古鳥が鳴くようになったって聞いていますけれど。

高崎 ああ、たしかにそうだね。

今の世の中の大きな問題と思うのは、何らかのものに対して信仰を持つとか、宗教団体に入って絶対的な幸福を求めるとか、あるいは、自由とか、愛とか、幸福とか、本来人間が本質的に求めなければならぬ、そういったものの考え方、あるいは人間が生きるってどういうことなんだろうというような、普遍的で大きな課題というものを非常に軽視して、例えば学校とか職場とかの会話の中からどんどん除外していつていることだと思ふんだよね。

純粹無垢なことを話す人に対して軽蔑の目が向けられるし、そういう人が嘲笑の的になつてしまつてゐるし、もしそういうことを口にしたりますと、「なんだオウムと同じじゃないか」というかたちになつてしまつたりする。

これは非常に許すべからざる現状だと思つてゐる。こういう現状に対して、人間が本来持つべき課題というものを、いろんな人たちの中で探求していくこと、真実を求めていくことは、そしてそれを正直に発言していくこと、これは恥ずかしいことでも何でもなくて、決して非難されるべきものでもないし、私たちが何かを信じて生きていくとすること、私たちが魂として成長する上で欠かせないことなんだよということを、いろんなかたちで世に訴えていかなければならないと思う。そして、それは私の一つの大きな役割だと、私自身思つてゐる。

だから、人から見れば、もうイツちゃつてゐるような僕のような人間に対して、こいつは世の中のこと何も知らないつて言つてゐるかもしれないけれど、笑われてもいいと思つてゐる。笑いたいなら笑えという感じで、僕は愛とか、自由とは何かということを、あるいは私が信仰してゐる尊師つてゐるのは何だったのかということ、正直にありのままを伝えたいと思つてゐる。そういう役目、僕の今生にはあると思ひます。それが僕にとつてのヴァジラヤーナ（金剛乗）の実践だと考えてゐる。

高崎流ヴァジラヤーナ

——じゃあ、高崎さんがなりの「ヴァジラヤーナ」というのはどういうものなのですか？

高崎 まず、尊師の前生の一つで、中国の明の王朝を作つた朱元璋 という人物のときがあるんだけど、そのときには血縁も含めて総計で何万人をも虐殺した。つまり自分の政策に反対する人を根絶したというか……。そういう前生があつたんだよ。

だから、私たちが話すレベルでの、四無量心とか愛とかとは、もう全然次元が違うんだよ。

——うーん？ ちょっと理解できませんね。

高崎 その他に尊師の前生に徳川家光とかあつたけれど、見てみればいい。さんざんキリシタン弾圧をやつてゐるし、それに目をそむけちゃいけない（巻末・参考資料②参照）。

——でも、これはある元信者の話なんです、その前生のヴィジョンの体験をしていて、麻原さんが徳川家光だったとか、朱元 だったことを認めてゐるんですよ。それでも高崎さんとは逆に、家光や朱元 っていうのはあれだけ悪いことをやつたじゃないかと。今の麻原さんも同じことをやつてゐるんだと。だからもう、輪廻転生において、麻原さんについていくのはイヤだと。麻原さんが、もし本当に、彼が自称してゐるマイトレーヤ（弥勒菩薩）であつたとしても、その次の仏陀に会いたい。そう言つてゐる人もゐるんで

す。

これは井上嘉浩さんもそうかもしれない。彼は教団にいたとき、麻原さんが朱元のとき、自分が地方の將軍の一人であつた前生を見たとか言っていたから……。

こういう人に対しては、どう思いますか？

高崎 その人たちもかなりイッチャってっているよね。でも、弱いねえ、その人たちは。

尊師のそれらの前生の瞬間瞬間を見るならば、たしかに悪とも言えるし善とも言えるかもしれないけれど、それをもっと大きな目というか、スケールの大きな歴史観で見て判断すべきだと思う。それを考えるならば、人間が考える善悪なんて関係ない。長いタイム・スパンで考えてくると、善悪なんて範疇に入らなくなる。

例えば、朱元 の時代では、国土の統一がなされて、モンゴル人を中国から追い出して中国人がアイデンティティーを取り戻したと。それだけでなくて、いろんな仏教・儒教・道教の經典がかなり集められて、それらの教えと尊師の支配というものを背景に、多くの人たちの意識の改革が行われたと。『西遊記』が書かれたのもその時代だよ。

徳川家光のときも、島原の乱以降は幕末まで戦乱がなくなつて、人民の心の安定が保たれるようになった。言ってみれば、戦国時代から完全に脱皮して平和が築かれた。鎖国制度も導入したし。

で、鎖国制度というのは、日本の歴史の汚点だなんて教育を受けてきたけれど、僕はそうは思わない。あれは国家レベルでの「出家」であつて、隔離された中で、自分たちの文化・理念というものを育てていった。西洋的な価値観を入れずに、独自の文化を育てていったと思う。つまり栄えていったんだよ。

——でも、そうならば、高崎さんが先ほど言つた、「麻原さんの目的というのは闘争であり、ぶつかり合いであり、それが進化に至るんだ」という考えと反しませんか？ つまり、その徳川家光なり朱元 なのは、国を統一して平和を作り出し、世の流れを安定させてしまったわけで、進化とは逆の方向に進んでしまったんじゃないですか？

高崎 いや、闘争と安定については、ヨーガの修行のように、やはり緊張と弛緩が一定したサイクルで必要だと思うんだよね。人間の神経に、交感神経と副交感神経があるように……。まず法則を背景とした国を作り上げ、それが墮落して限界に達したら、闘争によって破壊し、また法則を背景とした国を作つて安定させる。つまり、創造・維持・破壊の繰り返し。その過程において失敗があるのは仕方がない。弟子がまだ未熟なのだから……。尊師も「弟子は失敗しないと成長しない」とおっしゃっている。

「ボア」とか「ヴァジラヤーナ」の実践については、時代時代、その人の精神レベルや心の持ち方によつて、解釈の仕方が違う。それはこの説法を読んでほしい。（巻末・参考資料③参照）

——うーん？

高崎 それに、例えば家光の時代というのは、混乱した戦国時代の直後だった。もしそのとき、南蛮の文化とか、国外からの宣教師やキリシタンを受け入れていたならば、それをなすことによつて今以上の日本を望めたかと考えると、僕は明らかにノーだと思うね。

それは、戦後、西洋文化というのがどんどん入ってくるうちに、日本の風俗というのがとことん乱れてきたし、物質社会としては、高度なもの、豊かなものが築かれてきたけれど、それに反するように殺伐とした意識状態とか、邪悪な人間関係というのが増大してき

ていると思うし……。

何よりも、今のアメリカや西洋社会そのものが、決して理想的な社会構造だとか、あるいは理想に向かつている国だと思えない。

だから、あの江戸時代初期において、日本民族の気質とか仏教観みたいなものを守ったというのを考えると、現代にその精神はかろうじて受け継がれているし、あの家光の鎖国政策があったからこそ、今の状態まで日本は保つことができたと思う。

——じゃあ、麻原さんの役目は、家光のときは「安定」させることで、今回は「破壊」ということになるんですか？ 麻原さんが今回もたらした「破壊」というのを認めるわけですか？

高崎 それについても、たくさん言いたいことがあるんだけど……。

今、事件の真相が明らかにされているのに、尊師は「私は無罪だ」と言っているよね。それに対して、世論では「卑怯だ」と言っているけれども、まあ僕に言わせるならば、その事件の明細な事実というのは、それを調べる役目として警察なり公安なり検事なりがいるわけだから、彼らに任せておけばいい。そして、法律に背いた者は罰つせられなきゃならない。それを罰するなどは言っていない。

つまり、事件の事実に関しては捜査の担当者に任せておけばいい。じゃあ、私が事件の事実に関してどうとらえているかというと、一言で言ってしまうならば、「どうでもいい」と。

——じゃあ、今の教団広報部の見解みたいに、事件のことはわからないと。まだすべてが明らかになっていないじゃないかと。自分たちの修行だけが大切なんだと。そういうことを言うわけですか？

高崎 そう単純にはねのけたら乱暴だし、理解も全くなされないうし……。

僕はそのへんに関して、一歩も二歩も踏み込んで話したいと考えるんだけど、まず、第一に、いずれオウム真理教というのは、そのスタンスや宿命からして、国、国家体制というものとぶつかるべき存在であつたと。いずれ、ぶつからざるを得ないような、相容れない存在であつたことは間違いないと。

——まあ、ぶつかるうとしていましたからね。

高崎 いや、もう体質そのものが、麻原彰晃尊師をトップに、それに忠誠心を持って、それ以外の価値観というものを一切望まなかったし……。だから、それが拡大してくると、オウムというのは妥協性がないから、いずれ国体というものとぶつかなければならぬ。ならなかったことは間違いない。

言ってしまうと、それが早まっただけであると。それにむしろ、早い時期にぶつかったことは、たいへんよかった、幸運なことだったんじゃないかと思う。こちらから、ある意味で宣戦布告というか、アクションを起こして、それに対する国家権力の動きというものを早い時期に知ることができたから。だから、それに至る事実関係、事件その他云々というものは少なくとも「本質」ではないと思う。

教団に対して、僕はすべて信じているわけじゃないんだけど、米軍がオウムにサリンを撒いているとか、スパイがボツリヌス菌を撒いているとか、そういうふうに言われているし、僕もそれを信じて防衛庁で一生懸命やっていた。公安に対抗するためとかさ……。

そのことが事実ではなく、完全に自作自演だったとしても、そのぶつかり合いはいずれ

生じなければならなかったことだから、いいシミュレーションになったろうし、大した問題ではないと思う。

で、今となつては誰もが認めるほど、自作自演だということになっているわけだよね。オウムの防衛庁にいて、その自作自演の後処理をさせられていたのは僕たちだった。僕はその事実を知ったときに、完全に落胆が生じたんだよね。自分の心がガラガラと崩れていったというか……。いったい俺がやってきたのは何だったんだというぐらい。で、混乱して苦悩した。

たしかに今となつて振り返ると、自作自演だったということがいくつもあるんだよね。「貯水倉にマスタードガスが入れられた！ 全部洗い出せ！」と言われて、僕がゴシゴシ洗ったんだ。もうビショビショになりながら洗ったんだけど、そのときに村井秀夫さんが来て、「今回ののはひどいんだよ。この水を飲んだサマナが、マスタードで水脹れになってしまったんだよ」って言うわけだよ。僕とか防衛庁長官の岐部さんは「そうなんだー」って思い込んだけれど、実際そういう事実なんてどこにも明るみになってないよね。だから完全にデタラメであつたと言えなくもない。今考えると、至るところで思い浮かぶ点がある。

だけども、あるとき気付いたんだけど、仮にそうだったとしても、それはどうでもいいことじゃないかと思つた。あのつらい水槽洗いをしたり、寝ずにコスモクリーナーの取り付けをしていたとき、僕は何を思念していたかというところ、尊師やご家族、サマナの命を守るんだ。修行を進める手伝いをするんだ。そしてすべての魂を救済するんだ！」と。そういう思念を持ち続けていたんだよ。

そして、そういう思念を持つて自分の身を投げ出すだけのシチュエーションが与えられて、僕自身ベストを尽くしたと思つている。それがたとえ自作自演であつたとしても、僕はそれに対して落胆なり、失望なりをもう感じていない。僕がそのときに抱いた「志し」ってというのは、これ以上ない宝だと思つている。

「私は救済者にならなければならぬ」とか、「私は多くの魂の無智を取り払つてやらなければならぬ」という思いね。決して自分の汚れたイメージ、汚れた意識ではなくて、そういう思いを背景に全力でできたつてことは、僕にとつてたいへんな「心の財産」だと思ふし、改めて感謝し直した。なんてグルの愛つてすばらしいんだろうと。僕にとつて自作自演が関係なくなつたやつたというのはそういう意味……。

——高崎さんはそう思うことができるのかもしれない。だけど、多くの人たちが事件の真相を知つて、オウムをやめていますよね。それはどう考えるんですか？

高崎 僕の言つたことは、氣付きにくいことでもあるし、こういう現世的価値観の中に触れてくるとなかなか氣付けない状況になつてくると思う。本当は尊師が弟子を指導する上で、いろんなかたちで示唆を受けていたはずなんだけど……。

でも、私がこういつたかたちで公言することによつて、「ああ、そうなのか」と。「あれはグルの愛だったんだ」と氣付く人がいるかもしれない。

で、事実関係云々よりも、私たちはあのとき、救済者としての使命を持つとうとして努力したこと、それは私たちの大いなる「心の果報」として残っているんだと。そういう認識に立つことができるならば、あのときオウムの中で生きてきた「時」というのは無駄ではなかつたし、それを知つてもらうことによつてちよつとでも心が楽になつてもらえば、そ

れはたいへん意義があることだと思う。

—— たしかにそれはそうかもしれないけれど、それは昔オウムいたことがある人たちに對しての慰めに過ぎないでしょう。

でも、世間の大部分の人たちはオウムと聞けば、嫌悪して遠ざかるようになっていくだけです……。多くの人々の救済という点を考えるならば、やはりオウムの救済は失敗だったと思わざるを得ない。それはどうでしょう？

高崎 僕が考えるに、教団内部で行われてきたことは、救済の擬似体験というか、一つのシミュレーションであって、まあ、言ってみれば、社会に出るための準備期間だったんじゃないかと思うんだよね。

つまり、本当の真の「救済者」というものがあるとするならば、今までのオウムというのはそれになるための養成機関だったんじゃないかな。

救済活動？

—— じゃあ、「救済」っていうのは何なんですか？

高崎 それは、すべての魂を上流に向けさせること、ヨーガ理論でいうならば、「風（ふう）」、つまりエネルギーを上に向けさせること。あるいは多くの魂を覚醒に導くこと。真実に至る道を指し示すこと。この世の中に存在する煩惱、あるいは苦悩っていうのを完全に破壊すること。それは暴力的な破壊という意味合いでなくて、あくまでも煩惱、苦悩の破壊。

それは、まあ、尊師が絶えずおっしゃっている、「自己の苦しみを喜びとし、他の苦しみを自己の苦しみとする」という理念のもとに立たなければならぬ。多くの人たちの苦悩というものを自ら背負うことによつて、この仏教でいう「欲六界」（地獄・餓鬼・動物・人間・阿修羅・神々）の輪廻から解放を手助けすることだと思う。

—— でも、麻原さんのしたことは、多くの人に苦悩を与えただけじゃないのかな？

高崎 だからそれは、「カルマの理論」からいくと、何らかのアクションがあつて、その苦悩を感じる度量というのは、人それぞれ様々なんだよね。すべての人が同じ苦悩を味わったわけではないということ。

たとえば、島原の乱でキリシタンの人たちの中にも、いろんな虐殺・迫害を受けながらも、それを喜びとしていた人たちはたくさんいるはずで、その人たちは苦悩を苦悩と感じなかつたんじゃないかと。それは彼らの思想の中に、苦しみを味わえば味わうほど、天国にわれわれは近づけるんだという理念が彼らの中にあつたからだと思う。

それは仏教観も同じであつて、自分が苦しみ、悪業を背負うことによつて、多くの魂が過去の悪業を滅して、上流世界へ行く道筋が大きく広がると言っている。

—— じゃあ、島原の乱でいうならば、徳川家光は多くの人に苦しみを与えて、自分は

高崎 それは当然、「カルマの法則」からいって、味わったのだと思う。それと同時に、多くの魂が悪業を清算することができたという膨大な功德も積んだとも言えるけれど。

もし、その「カルマの法則」を否定するんだつたら、それは仏教の根本思想なんだから、お釈迦さまの教えをも否定しなければならぬことになる。中途半端な法則なんて存在しないわけだから、真理、教えというものは誰もいじれないのだから。

——じゃあ、徳川家光にしろ、朱元にしろ、麻原さんにしろ、一見多くの苦悩を与えたかもしれないけど、「ボア」だったと高崎さんは考えるわけですね？

高崎 うーん……。少なくとも、多くの人たちのなしてきた悪業を解放させ、カルマを解放させ、尊師が苦しみを背負うことによつて、それを清算したのは間違いのないと思う。それはヒトラーのやつてきたことについても同じことがいえる。これは理解しづらいと思うけれど……。

——でも、まあ、一般世間の目から見ると、麻原は一般信者とかけ離れた贅沢な生活をしていて、強大な権力を教団内で握っていて、その権力を守るために事件を起こしたと見られています。それで、逮捕されるときも、隠し部屋に隠れていて、卑怯なヤツだと言われているんだけど、それについてはどう思います？

高崎 尊師っていうのは、これは尊師も言っているように完璧な聖者でない。つまり、今生では聖と俗、両方兼ね合わせて存在しているんだよ。

で、私たちから見たら、単なる俗物に見える側面というのは、私自身もそう思おうと思えばそう思えるような場面は多々目にしているよ。

たとえば、尊師は徳の高い方であるから、たくさん信徒たちからの供養を受けるよね。で、みかんを何箱も布施されて、一度にみかんを七十個も八十個もあったという間にたい見えるけれど、けれど、それっていうのは、如来の胃袋といつか、貪り多き人間ともいう意識ではなく、一つ一つを神々への供養として瞑想しながら胃に入れているんだよ。私はそういう姿をいろんな機会に垣間見ている。

あと、たしかに、第二サティアンの方では、ダーキニーたちが三人いて、同じフロアーで生活していたっていうのを僕は知っているし……。そこで何があつたかというのは全然知らないけども。

——その一人のスメーターっていう十代の娘は子供を生んでいますよね？ そうであるなら、間違いなくセックスしていたでしょう？

高崎 ああ、そうなんだ。子供生んでいるんだ……。

たとえばそうであっても、それはタントラーナという、現世的観念の強い人にはわかりづらい、非常に深遠な教えがあるんだけど、それに沿った実践方法だと思う。

——麻原さんならそれができるっていうこと？

高崎 そう。そこで生まれた子がいるならば、その子供というのはたいへん徳の高い、菩薩として生まれてきた魂だと思う。

——じゃあ、高崎さんは、麻原さんのしたことはすべて正しかった考えるわけですね。セックスだったらタントラーナと。大食いするんだったら「如来の胃袋」と。すべてそうやって肯定しようとしている。

じゃあ、何で最終解脱のしていない高崎さんが、麻原さんは正しいんだと、最終解脱してそのようなことができるんだと認めるんですか？

高崎 いや、肉体を持った麻原彰晃尊師っていうものに帰依しているんじゃない。私が帰依しようとしているのは、麻原尊師が有している本質なんです。それはすべての魂が内在している仏性だと言ってもいい。

グルというのは一つの定義に過ぎないんだよ。私たちが向かわなければならぬ真我の

世界、シヴァ大神の世界、絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜のマハー・ニルヴァーナという世界を体現した存在であると僕は考えるわけで、現実的な行為として、グルがいかなる行動を示そうが構わないと。そのグルに対して派生する心の動き、それは疑念であるとか、嫌悪であるとか、闘争心であるとか、屈辱感とか不快感、それはすべて私たちの汚れなんだ、というふうに弟子としては認識すべきだと思う。でないと、私たちは自分たちに潜在的に根ざしている煩惱というものを破壊することができない。その煩惱を破壊する道を指示してくださったグル、麻原彰晃尊師というのは本物だと思う。

だから、グルの動きそのものに問題があるのではなくて、疑念というのはあくまでも私たちの心から発したものであって、汚れなんだと。

——うーん？ 自虐的だな……

高崎 自分の心から派生した汚れに対して、どのような方法で対処するのか、どのような方法でその煩惱を破壊するかっていうのは、克明に、ものすごい膨大な法、ダルマとして尊師の口から残されているわけであって、それによって、私たちは煩惱を破壊していく方法を知り得ていると。指し示されていると。それ利用するかどうかっていうのは、その人個人個人の問題だけだ。

グルイズムについて

——高崎さんは、麻原さんの言動を盲目的に受け入れようとしている。つまり、高崎さんは「グルイズム」なわけですね？ それは認めますか？

高崎 うん。そう言われてもいい。

でも、僕たちは生まれたときから「グルイズム」の中に存在していると思うんだよね。僕たちがお母さんの子宮に宿って、単細胞から細胞分裂を起こして、いろんな身体の変化をしながら成長していくよね。そのお母さんのお腹の羊水の中っていうのは、一種の宇宙空間であって、そこでは当然呼吸もしていない。

呼吸をしていないということは、仏教理論でいうと、究極の瞑想状態であるサマディ（三昧）だよ。ある程度の徳のある魂ならかなりの神秘体験をそこでしていると思う。で、その状態から、私たちは出産というかたちで、この重力に支配された地球に突き落とされたんだよね。

落とされた段階で、私はまず何を感じたかというと、呼吸しなければならぬという苦しみ。なんで苦しみかかっていうと、それ以前に感じていた自由を完全に奪われてしまったから。全く異質の世界へ突き落とされて、すべてのものが恐怖だった。自由を求めて泣く以外になかった。自由を返してくれと。

で、泣き続けて、疲れて寝て、また起きたら泣き始めるという繰り返しで、徐々にあきらめてきちゃうんだよね、この世界で生きざるを得ないんだという、いつてみれば絶望感というものがあつたはずであると。

そこで唯一、手を差し伸べてくれたのが、母親の子守歌であり、母親の温かいヴァイブレーションであり、仏教的な言葉で言えば慈愛であると。

その母親の子守歌とかやさしさというのは、お腹の中でも感じていたはずなんだよね。そのやさしさにあらためて触れたと。で、とことん慰めてくれるんだよね。とことん、私の叫び、苦しみ、それを受けとめようとしてくれるし、この地上における唯一の理解者で

あると感じる。もう、すべてである。

そこで、母親に完全に心を許すことができたなら、そのときグルへの絶対的信頼と同じと
いうか、完全に身をゆだねた状態が生じる。

——そのとき、母親がグルになるということですね？

高崎 そう。そこで、完全な精神的融合というものも得ているはずなんだよ。

で、そのスキンシップの中で、私がこう泣いたら親はこれをしてくれるとか、親がこう
声をかけたら子供はこういうふうに対応しなければいけないとかだんだん覚えてくる。一
つの法則性というものを、その場でどんどん理解していく。つまり一つの価値観の中で、
いわばグルと弟子の關係というものが成立するんだよね。

そのときはたいへん幸せであったと。だけどそれが全く別の人に抱っこされたりすると
恐怖を感じる。これは僕が記憶していることなんだけど、家の教会の信者さんに抱っこさ
れて（まあその人の匂いも酒臭かったし、すごくきつかったんだけど）、非常に僕をあや
してくれるんだけど、すごい異質のヴァイブレーションで、恐怖したし、不快感を感じた
し、一体なんていう世界があるんだ、というふうに僕は思った。

というのは、子供の世界っていうのは、見ているものが「すべて」だから。これは子供
だから世界が狭いとか、とも言えない問題であって、むしろ僕らよりも絶えずピュアに
意識を広げていると思うんだけど、その中に全く違う価値観が入ってきたときに不快感
を覚えた。

そのときに感じたのは、親とは違う世界があるんだなっていうことだった。で、そうい
うことを繰り返しながら成長していくんだけど、小学生の低学年のころまでは天真爛漫
で、感じたものすべてを開放的に表現できていた。まあ、これも人によって性格がいろい
ろあるかもしれないけれど、でも、そのときぐらいまでは親の世界も外側の世界も共存し
ていると思うんだよね。

だけどそれから、学校の教育とかによって、いろんな観念とか価値観が増えていくうち
に、一体何なんだ、という混乱に陥っていくようになっていくんだよ。親の完全なる支配
下というか、親の価値観のもとに生きていたうちは、たいへん幸せだったけども、いろん
な価値観に触れるうちに親の法則性というか、親とのスキンシップというものが絶対的な
ものじゃないということを知り始める。で、親から教わってきた観念、教育というのは
別の世界では全く通用しないじゃないか、一体僕は何を教わってきたんだという疑念を両
親たちに持ち始めるよね。

そして、反抗期に入っていくんだけど、反抗期っていうのは、今まで絶対的な信頼
を置いていた親に対する、やり場のない怒りであったし、一体これから僕たちはどこに行
ったらいんだというおびえがあったと思うし……。

で、それから僕たちは何を求めていったかというところ、やっぱり、より自由で、開放的で
、真実な世界なんだよね。一般的に、人間はみんな幸福を求めているってよく言われるけ
れど、幸福というよりも、言葉を言い換えれば、絶対的なもの、決して崩れないもの、永
遠なものなんだと思うんだ。

そして、それを至るところで求めていく。それは流行だったり、より強く見える存在に
対して夢中になったり、献身しようとしたりする。それは僕にとってロックだったりした
んだけど。